

## 直・街子・寅雄

中村 青史

犬の遠吠えが、竹林を装った闇の奥から聞えてくる。黒っぽい洋服姿の女詩人が一人、舞台の脇に現われる。寺山修司作「犬神」が、小っぼけな地下劇場で始まったのである。その女人詩に扮するのが徳永街子（青年座）であった。——この日彼女は賛助出演していた——その女詩人はこの劇での舞台廻しをする語りべなのだ。

汗のにおいが直接伝わってくるような、舞台と観客席との距離、出演者たちの汗がどきどき化粧をはがしながら流れ落ちる。むんむんする熱演が続く、すぐ眼の前で、すぐ横で。これらの衝動はしかし、脳の前面に響くだけ。じーんと脳髓にこたえるのは、語り。街子の顔は（全く目立たない化粧に服装なのだが）劇の進行とともに凄味を増してくる。フィナーレで、きつと首を斜めに振り、ガラリと輝かした瞳、沈痛ら語り、疎外された孤独な人間の怨念が餘情を漂わす。

U・快速邦第七回公演の行われたジャンジャンという劇場

は、渋谷の山手教会というのの地下であった。一時間（一幕）の劇はあっというまに終わった。終演後私は、ここを紹介して下さった津田孝氏と、近くのビャーホールにはいった。

徳永直は、未娘の街子さんを一番可愛がったのだそうだ。

津田氏の奥さんである姉のみちよさんは、作品に出てくるのも街子ばっかし、とそうよく言われるのだそうだ。未っ子を可愛がる親というのは、まあごくありふれたもので、そういう意味からだ徳永直という作家も、ごくありふれた人であったとも言える。ただ、トシヲ夫人が亡くなられたのが昭和20年で、その時、昭和9年生まれの街子さんは11歳であったはずだ。母親をなくした未娘に、特に目をかけた徳永直の心情はまた違ったものがあつたであろう。

徳永直は長男であり、父親はいわゆる「甲斐性なし」のところがあり、若い頃から親がわりに弟や妹の面倒を見てきた人であった。ことに末弟の寅雄氏や未娘のタツメさんを可愛がったようである。徳永は敬愛する母親をしきりに作品の中で描いたように、そして最愛の妻トシヲさんを描いたように、愛するものたちを作品世界に登場させた。

「熊本・徳永直の会報第八号」に、徳永直の手紙を紹介した。それは召集令状が来て出征せねばならなくなった弟（寅雄）に宛てたもので、その弟の身重の妻のことも含めての人情味あふれる内容の手紙であった。転向にからんで問題にされる「冬枯れ」（昭9・12）という作品は、私は好きで

ある。とくに末の弟（寅雄氏がモデル）に対する作者の愛情は見事に昇華されている。「冬枯れ」の中で、腫を輝かし来たるべき社会を語るあの明かるくたくましい少年車掌、しかしその彼はやがて戦争にかり出されることになる。フィリピン戦線に送られた彼は、昭和20年その地で戦死した。それ以前、中国戦線に従軍していたその弟は一度帰還している（尤の手紙は再召集の折のものである）。戦後の作品「にがい唾」（昭23・7）にその時のことが描かれている。「冬枯れ」のあの明かるく健康的な若者は、笑顔は作っても目は笑っていない冷徹さを備えた無気味な兵士像として現われている。戦争という残酷非道なものが、人間を変えてしまう。挫折した自分を乗り越えて前進してくれると願ったその弟を、戦争はまずその精神を奪ってしまったのだ。徳永直の静かな、しかし抑えがたい憤りが、「にがい唾」にはにじんんでいるようである。

徳永直と彼の末弟寅雄氏、そして徳永直が一番可愛がっていたという未娘街子さん、そこに私は一枚のネガフィルムの重なりを見る。かつて映画「太陽のない街」に端役として出演していた街子さんは、今や前衛派女優として堂々と生きていく。素顔の彼女にもお会いした。人なっこい明かるい奥様である。

「犬神」での女詩人徳永街子の語りを聞いているうちに、徳永直の作品があれやこれやと思ひ浮んでくる。「犬神」と

はおよそ関係ないような作品、それは「最初の記憶」であったり、「こんにやくを売る子ども」であったり、「彼岸」であったり、「妻よねむれ」であったりした。確かに、徳永直の文学は語りの要素をもっている。朗読に適した文章である。父親がペンで表現した作品世界を、娘が体で、声で再現しているように思えてならなかった。

小っぼけな劇場だから、語りべの女優徳永街子との距離は5メートルと離れていない。作品世界からのみ想い描いていた徳永直像が、生の人体としてではなく、やはり作品世界なのかも知れないが、ある確かな実感として身近かに感じられるのであった。

（熊大助教授）